

写真人とその本 2 /三堀家義

日本カメラ博物館 JCI ライブラリー
学芸員 宮崎真二

^{みほりいえよし}
三堀家義 (1921-2006) は、東京写真専門学校 (現:東京工芸大学) 在学中に土門拳の助手となり「文楽」の撮影に携わります。兵役とソ連での抑留を経て、1949年にサンニュースフォトスに入りました。学校での専攻と、土門の特徴的な技法であるマルチフラッシュ撮影に携わった経験から、フラッシュシンクロに関して専門的な知識と技術を有していました。



『シンクロ写真術』

1952年には玄光社から『シンクロ写真術』を発行しました。同書には木村伊兵衛と土門が序文を寄せているほか、「集団フォト」会員による作例と採光図解が掲載されています。本文はシンクロ装置、発光器、電池、閃光電球の説明、露出決定、撮影技法、トラブル対応法について解説しています。特に露出決定については、撮影距離と絞りを掛け合わせた「露出係数」(ガイドナンバー) という概念を理論的に説明しているなど、「シンクロフラッシュはあくまでも科学であり技術です」(まえがき) という姿勢が表れています。

1954年にはフリーの写真家となりました。特にこの時期はフラッシュバルブの後継となるエレクトロニックフラッシュ(ストロボ)の国産化黎明期であり、技術発展途上の新製品に対して、写真雑誌の記事で理論的かつ実践的な評価を下しています。

1958年には日本教育テレビ(現:テレビ朝日)へ入社して映画をテレビ画像に変換する際の画質向上に尽力し、1964年には東京オリンピック記録映画協会の撮影技術顧問となりました。その後『アサヒカメラ』の1969年2月号から1978年12月号まで110回にわたり、交換レンズやストロボの比較検討、黑白フィルムの現像法などを解説した「テストレポート」を担当するなど、メカニズムに強い写真家として、1980年代半ばまで写真雑誌にて技術関連記事を数多く執筆しました。



『黒ダイヤの戦士たち』

2000年には『黒ダイヤの戦士たち』(JCI フォトサロン)を発行しました。同書は1954年から3年間にわたって、石炭産業最盛期であった全国各地の炭鉱で現場を記録した写真展の図録です。坑内、特に最先端の切羽はヘルメットのランプが唯一の光源という厳しい条件下で撮影するために、当時の最高感度フィルムを増感現像し、製品化まもない大口径レンズを絞り開放で使用するなど、自らが求めるテーマに対して合理的に技法と機材を選択して創られた作品群となっています。